

「第6回 植物病理を紡ぐ会」開催のお知らせ

日本植物病理学会大会開催時に、若手中堅研究者有志による自主勉強会「植物病理を紡ぐ会」を開催しています。学生および若手会員が互いに情報交換し、親睦・交流を深める場としていくつかの地域部会において「若手の会」が開催され、活況を呈してきました。我々世話人一同は、全国大会でもそのような場をつくり、①「現場から実験室まで」「基礎から応用まで」という植物病理学が扱う対象の広さを知ってもらい、②そのような病理学を学んだ人間の将来の選択肢の広さを知ってもらうことを第一の目的としています。第二に、特に年齢制限など参加条件を定めないことで、若手だけでなく、分野や業種、世代の垣根を超えて参加者全員と一緒に植物病理学を様々な角度から考え、交流を図る場にしたいと考えています。今回、特別ゲストとして、眞山滋志博士（神戸大学 名誉教授、吉備国際大学）にご登壇いただきます。講演終了後にはウェブ懇親会も企画しております。幅広い分野にわたる植物病理学会の良さを生かしたヘテロで活発な議論や交流を世話人一同期待しております。学生および若手の皆様、また本会の趣旨にご賛同の皆様には、この機会にぜひ奮ってご参加ください。

〈日時〉 令和 5年 3月25日(土) 13:30~17:30

〈会場〉 オンラインにて実施（参加申し込みされた方にメールにてURLをお送りします）

〈参加費〉 無料

〈詳細告知用WEB サイト〉 <https://www.facebook.com/植物病理を紡ぐ会-811362728949422>

〈参加登録フォーム〉 https://docs.google.com/forms/d/15zcaNIE76afsIAIYoo5mOGP5uVIHQZzG_Iflu_wMsEg/

〈プログラム（敬称略）〉

13:30~ 開催

13:40~ 坂田七海（筑波大学）

「博士号取得までの道のり~経験×選択の積み重ね~」

14:20~ 藤原正幸（ヤンマーホールディングス株式会社）

「農機メーカーであるヤンマーが取り組む「植物病理研究」について」

15:00 休憩

15:10~ 清水将文（岐阜大学）

「発病抑止土壌をつくるという夢を叶えたい」

15:50~ 中野亮平トーマス（マックスプランク植物育種学研究所）

「植物マイクロバイオータ研究の新時代を創り出すために」

16:30~ 休憩

16:40~ 特別講演 眞山滋志（神戸大学 名誉教授、吉備国際大学）

「植物病理学との出会いが創った道」

17:30 閉会（参加者写真撮影）

18:00~ Web懇親会

〈Web懇親会〉 18:00~21:00 参加者自身で、食べ物、飲み物を準備してください。

参加人数により、グループにわけて行う（移動可）予定です。

〈参加申込〉「参加登録フォーム」に直接アクセスし、参加申込フォームにてご登録ください。

*3月22日(水)までに事前参加登録をよろしくお願いいたします。

〈世話人代表〉

浅井秀太（理研）、安達広明（京都大）、鶴家綾香（国際農研）、深田史美（岡山大）、峯彰（京都大）

（あいうえお順）

〈問い合わせ先〉

浅井秀太 e-mail: shuta.asai@riken.jp（“あ”を@に変換してご利用ください。）

TEL: 045-503-9574

【講演要旨】

「博士号取得までの道のり～経験×選択の積み重ね～」

坂田七海（筑波大学）



私は、昨年度の3月に博士号を取得し、やっと研究者としての免許証を手に入れたばかりです。まだまだ分からないことだらけですが、自分の気持ちに正直に流れに身を任せてきた私の研究生生活について紹介したいと考えています。学生さんの多くは、「就職しようか？進学しようか？」「どんな仕事に就こうか？」などなど、自分の進路について迷いがある方もいらっしゃるかもしれません。私自身、もともと博士課程に進もうとは考えていませんでしたが、指導教員をはじめとした多くの方々の影響を受け、研究を続けたいと考えるようになりました。本発表では、「なぜ博士課程に進もうと考えたのか」「なぜ研究者を目指そうと思ったのか」などを、自身の経験や研究内容を通してお話できればと思っています。

「農機メーカーであるヤンマーが取り組む「植物病理研究」について」

藤原正幸（ヤンマーホールディングス株式会社）



学生時代研究というものに初めて触れて以降、絶えず「植物病理研究」と密な関係が続いております。学生時代のキュウリモザイクウイルスからポストドク・教員時代のイネいもち病菌に関する研究を、多くの人と出会い、共に汗と涙を流しながら実施してきました。その間、様々な研究環境・体制、身分、周囲の人々が変わってきました。そして現在、ヤンマーという企業に在籍し、現場で起こる様々な病気への対策、病気に打ち勝つ方法に関する研究を実施しています。言うまでもなく、その全てが私の財産ですし、全てが今の仕事に取り組むための礎となっています。

今回の「紡ぐ会」では、現所属であるヤンマーという会社のこと、そして私自身のよもやま話をお話したいと思っています。

「発病抑止土壌をつくるという夢を叶えたい」

清水将文（岐阜大学）



皆さんご存じかと思いますが、土壌病害の発生がほとんど認められない、または発生が少ない“発病抑止土壌”と呼ばれる摩訶不思議な土壌が世界各地に存在します。様々な研究から、それら発病抑止土壌の病害抑止性は、多くの場合、土壌微生物叢に起因することがわかっています。このことから、多くの研究者が発病抑止土壌を人工的に作り出すための微生物叢改変技術の開発に長年挑んでいます。私自身も、学部生の頃に講義で発病抑止土壌の話聞いてから、いつかはそういう技術を開発してみたいと考えるようになりました。そして、大学で職を得てから、多くの学生さんの力を借りて地道に研究を進め、10数年かけてようやく発病抑止土壌の作出に応用できそうなユニークな化合物を発見することができました。今回は、その研究についてご紹介したいと思います。



「植物マイクロバイオータ研究の新時代を創り出すために」

中野亮平トーマス（マックスプランク植物育種学研究所）

植物と相互作用するのは病原菌や共生菌だけではありません。植物組織には他にも多種多様な微生物が定着していて、ある種の微生物コミュニティ（微生物叢あるいはマイクロバイオータ）を構築しています。植物と病原菌の相互作用や植物の発生理など、植物に関するあらゆることはこのマイクロバイオータの存在下で捉える必要があります。この10年ほどで次世代シーケンサを用いた「菌叢解析」による記述が爆発的に進み、現在はその機能制御やコミュニティ構築の分子メカニズムの解明が課題となっています。

私はもともと植物細胞生物学を専攻し、無菌環境下の植物細胞における小胞体の膜ダイナミクスを研究していました。その後ドイツに移り、マイクロバイオータと植物の相互作用について分子遺伝学的な解析を続けてきました。ドイツに移って丸10年というこの節目で、これから新しい方向に研究を発展させるために何が必要か、これからどこを目指していけばいいかなど思案を重ねています。本発表では、自分の研究の半生を振り返って現在までの点を繋ぎつつ（connecting the dots looking backwards）、きっとそのまま繋がっていくと信じながらどこに点を打っていくか、新しい植物マイクロバイオータ研究を創り出していくためのアイデアについてお話ししたいと思います。



「植物病理学との出会いが創った道」

眞山滋志（神戸大学名誉教授、吉備国際大学）

本会で話題提供を依頼され、思い出話で良いとのこと引き受けた次第です。植物病理学の道、紆余曲折ありましたが、大学での研究・教育に携わって参りました。「光陰矢の如し」、あっという間に傘寿を迎え、何かと懐古趣味が出るこの頃です。はじめてのゼミで論文抄録した感染生理的研究に興味をもち、また先生方が参加された第一回日米植物病理科学セミナー（1966年、蒲郡で開催）の話題に強く惹かれ、米国留学を志しました。学位取得後、ポストドクを経て帰国、研修員および学振奨励研究員としての約3年半の辛抱をし、ようやく大学助手に採用され、安定した研究環境に身を置くことの喜びを感じました。香川大学、そして神戸大学における研究課題は私には興味があるもので、学生・院生らと共に積極的に取り組みました。自ら実験に励んだ若い時、学生・院生らと議論を重ね研究が進展した頃が懐かしいです。その頃、大学法人化への準備や管理職が入り、研究者・教師としての生き甲斐が低下し寂しさを覚えました。退職後、タキイ園芸専門学校や吉備国際大学農学部で教壇に立ち、同大学に地域の病害防除を支援する植物クリニックセンターを設けるなど、明日の地域創成に資する人材の養成に努めました。以上、恩師・先輩の先生方、研究室の先生、院生・学生、また共同研究した国内外の先生方との出会いのたびに創出した課題にチャレンジした歩みを振り返り、「温故知新」の思いにつながれば幸いです。